

比較文化論 2016後期

(4)

日本語の多様性(2:歴史的変化)

1

10-11世紀 平安時代語

- (1) あふからも ものはなほこそ 悲しけれ
別れむことをかねて思へば(古今和歌集429)
- (2) 雪の内に 春は来にけり うぐひすの こほれる涙
今やとくらむ (古今和歌集4)

→

・“係り結び”がある

・終止形・連体形の区別がある

[現代語]この話は 悲しい。 / 悲しい話

[古代語] こ は 悲し。 / 悲しき話

10-11世紀 平安時代語

- (1) あふからも ものはなほこそ 悲しけれ
別れむことをかねて思へば(古今和歌集429)
- (2) 雪の内に 春は来にけり うぐひすの こほれる
涙 今やとくらむ (古今和歌集4)

→ 語頭以外 ハ行音=ワ行音
い・ゐ・ひ=“い”、え・ゑ・へ=“え”
お・を・ほ=“お”

11

18世紀 江戸時代語

- (1')逢フタラウレシイハズヂヤニ。逢ヒナガラモヤ
ツハリソレデモサ。カナシイワイ。アヘバマダ別
レヌサキカラハヤ。別レルコトヲ思ウニヨツテサ。
- (2')マダ雪ノツモツテアル処へ。春ガキタワイ。コレ
デハ驚ノ氷ツタ涙モモウトケルデアラウカ。

(本居宣長『古今集遠鏡』1793年頃)

12

12-13世紀
平安末期～鎌倉時代語

(3)音モ不惜ズシテゾ、泣々ク返リニケリ
(今昔物語集 卷16-9)

(4)身にしみし をぎの音には かはれども
しぶく風こそ げにはものうき(山家集)

13

古代語と近代語の違い

例えば『日本語表現の流れ』(阪倉篤義1993, 岩波書店)より

a. 語彙の構造: 単音節語から複音節語へ
(音韻変化・語彙変化)

- ・「あ」→「あし(脚)・あぜ(畦)・あみ(網)・あれ(吾)」
- ・「と」→「あと(跡)・とを(十)・かど(門)・とびら(扉)」

b. 句の接続: 条件表現の変化
(文法変化)

未然形+ば: 仮定条件 → もしするならば・たら
已然形+ば: 確定条件 ~ので・から
 ~と、~ところで、ゆえに.....

14

古代語と近代語の違い

例えば『日本語表現の流れ』(阪倉篤義1993, 岩波書店)より

c. 文の構造: 疑問文の変化

[上代]カ(疑い)ノヤ(問い)

- ・虎か吼ゆる(万葉集199)(吼えているのは虎だろうか。)
- ・そらみつ大和の国に雁卵産と聞くや(古事記・下)
(お前はこの大和の国で雁が卵を産むと聞いたことがあるか?)

↓

[現代]カ(疑い・問い・確認・詠嘆・選択...etc.)

(文法変化)

意義区別の強化(・その要請)
分析的・論理的表現への指向(その要請)

15

古代語と近代語の違い

例えば『日本語表現の流れ』(阪倉篤義1993, 岩波書店)より

d. 文の性質: 格の明示、係り結びの崩壊
(文法変化)

- ・月Φ 出づ。 → 月が出る。
- ・月Φ めづ。 → 月を愛でる。

意義区別の強化(・その要請)
分析的・論理的表現への指向(その要請)

16

情意性から論理性へ

- (ヤからカへの変化は)「問い」的表現から「疑い」的表現へと変わってきたということである。「や」による問いかけが.....情意性の濃い「問いかけ」であったのから、「か」によって疑問点をはっきり相手に示すことによって、その回答をもとめようとする論理性の強い「問い」へと変化したと、これをとり纏めて言うことができそうである。その変化が中世を境にして著しく進んだというのは、やはり、比較的等質な人々による、閉じられた社会において行われていた言語から、さまざまな階層の人々相互のコミュニケーションが必要となった、更に開かれた社会に行われるべき言語へと、日本語が変化したことの一つの表れであると言えるのではなからうか。(阪倉1993:210)

17

未分化から分析的表現へ

- ...日本語の表現は、古代語から近代語へと、次第にその論理性を明かにする方向へ進んできたと言うことができよう。
- これを更に言うならば、もと、限られた相手に対する深いコミュニケーションの場で、「係り結び」や推量の助動詞などを多用して、情意に富んだなれあいの表現を主にしていた段階から、開かれたコミュニケーションの場で、論理を明確にした表現によって、事柄自体に語らせ、もって、相手の諒解を得ることを目指すものへと、日本語のもの言いが変化して来たことを意味するともいえるのではあるまいか。
- 格助詞による関係の明晰化、これらはすべて、いわば、個が未分化に抱え込んでいた意味・機能が、他の要素との結合によって、個別化され、明確化されてきたということである。...未分化から分析へという表現の流れ」(阪倉1993:268-269)

18

16世紀末 室町時代語

- (5)馬ほのかにこの由を見てうらやましく思ひけん、
「あっぱれ我もかやうにこそし侍らめ」と思ひ定めて
(仮名草子伊曾保物語「馬と犬との事」) 文語
- (6)ろば、この由を見てうらやむ心が起こったか、我もあ
のごとくにして愛せられようと思ひ
(「狗(兎のこ)と馬の事」天草版伊曾保物語) 口語
- roba cono yoxiuo mite vrayamu cocoroga vocottaca,
varemo anogotoquni xite aixerareôto vomoi,
(‘Yenocoto,vmano coto’)

21

古代語VS近代語

- 平安時代末(院政期)～鎌倉期頃
: 音声面、文法面の大きな変化
→ 室町時代ごろまでに完成
 - 日本語の歴史を大きく二分するなら
 - 古代語: 上代～院政鎌倉期まで ... 古代語
 - 近代語: 室町期～現代まで ... 近代語
- ➡ 室町時代くらいの人から話しが通じる

23

“口語”文献

- 中世(～室町時代)
 - 庶民(向け)の文書:説法、申し文...カタカナ文書
 - 抄物:講義録(手控え)
 - キリシタン資料:日本語学習書 対話
 - 近世(江戸時代以降)
 - 演劇台本:セリフ
 - 狂言・歌舞伎・浄瑠璃台本
 - 俗語辞書・方言辞書
 - 大衆文芸:滑稽本,断本,洒落本,人情本...
 - 近代(明治期以降)
 - 落語速記本、講演録
 - 現代
 - 日常会話、各種文芸・映像作品
 - (ドラマ・映画)のセリフ
 - 方言、ブログ...国会会議録
- 多様な場面・社会的位相
- 言文一致の後も“口語”資料は言語研究の重要資料

28

鎌倉時代の口語:カタカナ文書

- (7) 一 ランサイモクノコト、.....テウモウノアトノムキマケト候テ、
ヲイモトシ候イヌ、ヨレラカコノムキヲマカヌモノナラハ、メコトモヲアイコメ、
ミヽヲキリ、ハナヲソキ、カミヲキリテアマニナシテ、ナワホタシヲウチテ、
サエナマント候ウテ、...
- (一、御材木の事、.....逃亡の跡の麦蒔けと候て、
追い戻し候いぬ。「俺らがこの麦を蒔かぬものならば、妻子共を追い籠め、
耳を切り、鼻を削ぎ、髪を切りて尼になして、縄絆を打ちて苛まん」ト候うて)
- (8) 一、コノ四人ノ百姓ラ、コリヤウニアントスヘキトコチヤ候ヘトモ、
マスマスニチトウトノ、コカミヲカケラレ候ヘハ...
- 一、この四人の百姓ら、御領に安堵すべきと御座候へども、
ますますに地頭殿、小腹(こかみ)をか(つ)蹴られ候へば...
- (紀伊国阿豆川荘片仮名書百姓書状(1275建治元年))

(c.f.古文の定番『徒然草』は1330年代頃成立)

30

15-16世紀 室町時代の口語:抄物

- (9) 日ハ東カラツルゾ。東ハ方ノハジメナゾ。
大明ト云ハ天下ガドツコモ同ク明ニナルホトニ
大明ト云ゾ。(玉塵抄)
- (10) [客路羊腸遠 市橋雁齒危]
羊腸ト云ハ、路ノアチコチへ曲ルヲ云ゾ。
羊腸モグリヽト廻ル物ゾ。
橋ノ板ノ落タハ、雁ノ齒ノ抜ケタヤウデアレバ、
渡ルガ危ナイゾ。(湯山聯句鈔)

31

19世紀 滑稽本 上方語と江戸語

- (18) かみがたすぢの女、ずんぐりとした風俗、いろ白にてくち
びるあつく、目のふちは紅のぼかし、口べにくろびかりに
濃くぬり、ふといかうがいを白紙にてぐるヽとまきたるは、
湯氣にてべつかうのそらぬためなり
- かあいらしいこゑにて かみがた「お山さん、あろう寒いな。
何じやトモウ此間はお腹の耦合がわるうて、夜さり毎に
腹痛でづないはいな。それじやさかい、風呂になと入て
温めてこまそと思ふて、なアんほも入ツてじやはいな。お
山さんあれ見イ。お家さんの傍に立て居なます嬰兒さんを見
イな。ありや何色じやしらん お山「あれかエ、あれは
紅かけ花色といふのさ かみ「いつかう能う染めてじやな
ア 山「薄紫といふやうなあんばいでいきだねへ かみ「い
つかう酔じや。こちや江戸むらさきなら大好ヽ。こちやあ
ないな(あのやうなといふこと)着物がしてほしいわエ
- (『浮世風呂』二編巻之上1810年)

38